



OMEGANE

日常の、目に触れる物から浮かぶアレコレ。

特集「もの作りの意気」

Design talk 「印刷されたものは、」

Global View 「五体不満足」

視点論点問題点

ものコレ

ピンポイントな世界

さらに色色

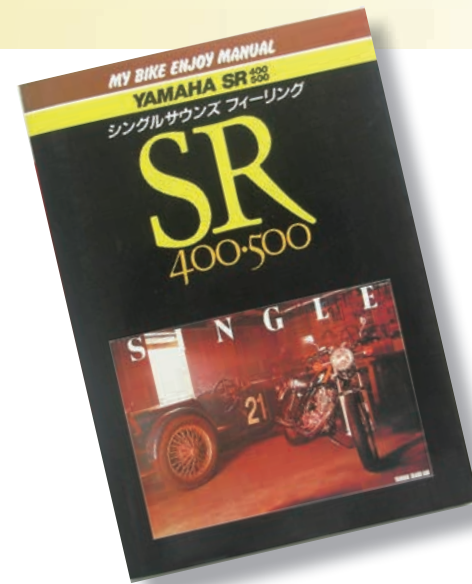
もの作りの 意気

アートを筆頭に、モノや事などにおいて、創造する人間がもつ
意気込みみたいな物を、作品から感じる事が多々あります。
日常の仕事の中では、繰り返しの作業になりがちと感じているだけに、
そういった作品に向き合うと姿勢が正され、
背筋が伸びるような気持ちになります。

エンジンの時代の終焉

ヤマハSR400へのオマージュ

■ 岡野祐三



2008年「ヤマハSR400」がついに生産終了となった。

SR400は発売以来30年もの間、大きなモデルチェンジ無しに生産され続けた奇跡的超ロングセラーのバイクである。

発売当初から古き良き英国バイクを再現したようなコンセプトだったので、それから30年、現在から見れば二重の意味“ヴィンテージ”だといえる。

私が20代の頃、30歳代になったら…つまり大人になったら、きっとこのバイクに乗ろう…と憧れた。そして実際所有して乗っていた時期もある。

そのオートバイらしいクラシックで端正なスタイル。今時キックスタートのみの始動は儀式とも言える程コツがいった。そして何よりエンジンの空冷フィンの形状と、そこから優美なカーヴで後方に伸びるエキゾーストパイプの造形が素晴らしく、手放すときせめてこのエンジンと排気管だけでも手元に…と願ったが、叶わなかった。

そのバイクがとうとう生産中止となったのは、生き残りのため度々対応してきた排ガス対策が、とうとう間に合わなくなったからと聞いている。

温暖化のさまざまな影響を身近に感じる事が多くなり、ガソリンの高騰、エコ意識の高まり、若者の嗜好の変化、そして世界同時不況の影響から車離れが激しい…こうした状況を背景に、私たちの車社会はハイブリッド車を皮切りに、確実に「電気自動車」の方向にシフトしつつある。

私にとってSR400の生産終了は、このガソリンエンジン（内燃機関）の終焉を最も実感を持って認識せざるを得ない出来事だった。

これを境に歴史あるエンジン（内燃機関）の時代を締め、「電気自動車」へのシフトを認めようと思う。

私がSR400の形や、走りのフィーリングに魅せられた様な感覚的なこだわり（それはエンジンの時代が長い時間をかけて熟成させてきた感覚であり文化でもある）は、しばらく意味を失うだろう。今は「移行」そのものに意味があるからである。

しかし人類から「車」そのものを無くすわけに行かない以上、目指す目標が「電気自動車」なのか「水銀電池車」なのかわからないが、つねに改良は加えられ続け、必ず熟成の時期がやってくるだろう。その時、形や、走りのフィーリングに魅せられる新しい車や、それに魅せられる人たちがまた現れるのかもしれない。（後日談：2010年、環境対応をクリアしてSR400は再発売されました。）

無有好醜の願

般若波羅蜜は即ち般若波羅蜜にあらず
これを般若波羅蜜と名づく

金剛教より

■ 堀木一男



動物画の奇才・薮内正幸の世界展

絵が描けるってすごい。

■ 山田純一

大無量寿経中の48願中の4願。阿弥陀如来となる前の法蔵菩薩が発した願。

その意味するところは、「たとい私が仏と成り得ても、浄土においてももろの人たちの形が同じでなく好き者と醜き者とに別れるなら、私は仏に成らぬ。」というものである。

浄土の美というのは、一元の美であり、好（美）・醜の二元の世界がなくなるようにとの願である。一元の美を不二の美ともいう。

柳宗悦はわれわれの世にある、力のある者・ない者、才能のある者・ない者、美しい者・醜い者という二元論的な世界をうち破り、皆が同じでなく、違っていながら全てが美しいという境地での仕事ぶりをここから説いた。

現実に存する茶碗の大名物「喜左衛門」と呼ばれる井戸茶碗はそれを実現しているというのだ。

この井戸茶碗は、300年前無名の朝鮮の陶工の手になるもので、無心のあわただしい生活の中から生まれたものだ。

民衆の雑器として沢山作られたものが見いだされ、茶器に転用され大名物になったものだ。

以来この方、時代時代の作家がこれを超えようと挑んでいるがこえられていない。だから、こういえる。井戸茶碗は井戸茶碗ではない、これを井戸茶碗と名づけよう。となるのだ。私は私ではない、これを私と名づけよう。わかった？



うクオリティーにクラクラしながらもその分、得る物も多く、とても、かなり、すっごく参考になった。（活かせるかは分からないが）写真の画集は、今回の展覧会用ではなく薮内正幸美術館に用意されているスケッチ集。

自由に、生き生きとしたタッチで動物や鳥たちが描かれている。迷い線というより、遊び線が多く、描き方が楽しげで、見ていて飽きる事がない。

ちょんちょんちょんと、わずかなタッチで仕上げた鳥の落書きや走り回る線の中から造形される動物の、見事なまでの表現力に感嘆。

2009年5月、吉祥寺美術館にて開催。

「どうぶつのおかあさん」や「くちばし」「しっぽのはたらき」などの絵本からアニメなどの雑誌、動物図鑑などで活躍されていた薮内正幸の展覧会を見に行く。

印刷を念頭に置いたカラーイラストの迫力と躍動する筋肉を覆っている毛並みや、羽根の重なりを表現した繊細なモノクロのペン画を、のめり込むように鑑賞。

芸術家ではなく、イラストレーターであり挿絵画家というスタンスの絵は、修正の後が沢山残っていてむしろそれが得も言われぬ迫力に感じられた。

雰囲気ばかりの絵本の中で、こうした科学的に正確な形を、子供たちに提示してきた意味は大きい。

子供を必要以上に幼児扱いしないスタンスに共感する。

カラーイラストもさることながらモノクロのペン画の見事に衝撃を受けた。

個人的に趣味で、チマチマとペン画を描いていたので明らかに違

マイケル・ケンナ写真集

「レトロスペクティブ 2」

写真芸術は奥が深い。写真家のフィルターは現実を超える。

■ 岩崎邦好



だいふ前に購入した写真集です。書店で観た瞬間からほしくてたまりませんでした。自分の感覚とピッタリ合う美意識を漂わせていました。

英国の写真家マイケル・ケンナ氏は、人のいない風景を詩的に写し出す写真家です。

現実の風景とはかなり違って印画紙に定着させているのは一目瞭然ですが、ただの風景を崇高なる美の世界へ昇華させています。

暗室の作業で風景を自分の風景に作り変えているのでしょう。写真家？、職人？、芸術家？。その造形感覚は見事です。圧倒する美が支配する世界においては、言葉は意味を失い沈黙がすべてを語ります。



もの作りの

喜び

シンプルさの中の美しさ

1873年、ドイツに誕生した「ニーシング」。

私のお気に入りのジュエリーブランドです。

■ 沢田寛子

“ドイツの造形学校「バウハウス」の流れをくむ、シンプルで研ぎ澄まされたデザインは、完璧な美しさで見る者を圧倒します。

地金のテンションだけで支えられた、空間に浮遊するようなリング...”

雑誌などに紹介されるニーシングを表現する文章です。

私が持っているのは、ステンレススティールとシンセティックの組み合わせのペンダントと指輪です。

人工的につくられた宝石のことをSynthetic（人造）と説明するそうですが、鉱物的構成は天然のものと全く同じです。

屈折率が非常に高いので、輝きは天然のものより光って見えます。プラチナなどと比較すると、ステンレススティールは光が鈍くてくすんだ色をしています。だからこそ、このピュアに輝くシンセティックとの組み合わせは相性が抜群なのでしょう。

ボリューム感のあるこのリング、一見指に食い込みそうなこの宝石ですが、実際は指にしている、ほとんど違和感なくフィットします。

繊細なクラフトマンシップと、ハイテクノロジーの進化した製造技術。

ドイツが生んだ誇り高い作品がまた一つここにあります。



以前にテレビで ルーシー・リーが紹介されまして、それをたまたま観たんです。

僕、陶芸は全然詳しく無いしやったことも無いけど、紹介された作品を見て「すげーキレイ。実物が見たい！」って思って、そしたら展覧会がやっていると知りましたので…行きました。

この展覧会はエルンスト・ガンペール、ルーシー・リー、ジュニファー・リーの3人展。

エルンスト・ガンペールは、木をろくろに取り付け薄く削ってって作るうつわ。ルーシー・リーはろくろを使った磁器に色んな釉薬でキレイな色のうつわを作り出す。ジュニファー・リーは手捻りで素焼き。酸化した金属の粉を練り込み渋い色を出す。

三者三様。それぞれの人のインタビュー（昔のテレビ番組）が会場で流されていました。

ルーシー・リーのがすごく良かった。80歳のルーシー・リーが作業をしながらインタビューを受けているのを撮ったもの。すごかった。80歳であの手の動き。しゃべりながらも精密な作業も出来るという。いや〜、刺激を受けました。

ジュニファー・リーの手捻りでの作業もビデオが流れてましたが…あんなにキレイな曲線が手で作れるのかと…すごい。しかも色は、混ぜる酸化金属粉の種類を変える事で出しています。素焼きで模様が出るのにはそういった秘密があるのだそうです。実物見るとこれは凄いです。

エルンスト・ガンペールの木を使って作るうつわは、木目によって乾燥した時に収縮が変わってくる。それによって奇妙なゆがみがつわに生じる。自然の力を借りる事で作ることの出来る形。

■ 飛鳥井羊右

U-Tsu-Wa

東京ミッドタウンの21_21 DESIGN SIGHT

『うつわ U-Tsu-Wa』展



人の力だけではとうてい作ることができない。

三者三様ですが、共通している部分は想像や計算を超えた所に目指す美しさがあるということ。

人の手、人の考えでコントロールできる範囲では驚くものはできない。

乾燥の時、木目によってゆがむ…

火の入れ具合や釉薬の配合のちょっとした違いで色が変わる。

金属の粉で出る模様は焼いて初めてわかる。

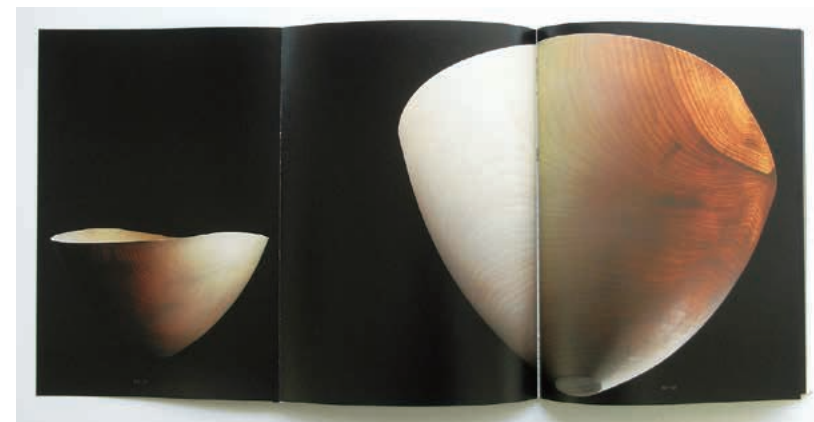
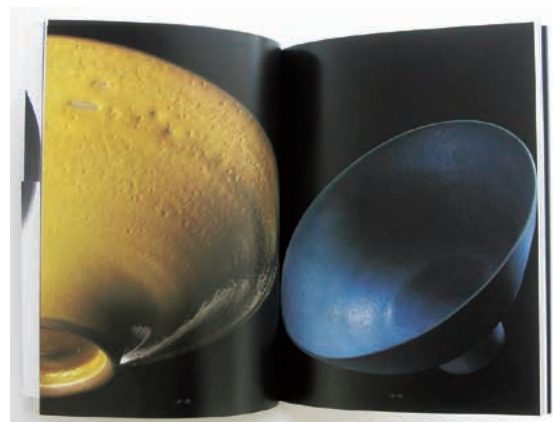
完全なコントロールなどできないのです。

自然の力を借り人の想像を超えるものを作る事、自然無くしては人は存在できないという事実がそこにある気がします。

ところで、この展覧会の会場構成が安藤忠雄さんだったのですが…。かなりカッコいい展示の仕方なんだけど…広い所に点々と作品を置いていて、それを遠巻きに観る。もう少し近いと良かった。一応、展示の仕方には星座の星の配置という意味があるんだけど…。小さい器とか良く見えない…。しか〜し、その分この図録の写真がキレイ！ 本の作りもすごく美しいし、紙も良い。そしてこの豪華さに対してかなり安い！ なので即買いでした。

全ての作品になんとか「和」のテイストが感じられたのは何か通じるものがあるのだと思います。

2010年の4月に国立新美術館にて「ルーシー・リー展」がある予定なので、その時は、もっと近くで見られる事を期待します。



『五体不満足』の海外版を知っていますか？

乙武洋匡さんの書いた『五体不満足』は出版当時色々なメディアで取り上げられ、読んだ人も多いのでは。

私もその一人で、我が家の本棚にいつもその背表紙だけは見えています。最近この本のことで嬉しい再会をしました。



私の通う教会の牧師先生が、大人と子供たちとの合同礼拝の中で、この本のことを取り上げて話してくださいました。

以下にその時のお話の一部を引用させていただきます。

1998年に出版されたミリオンセラー、乙武洋匡著『五体不満足』は翻訳され海外でも読まれています。

英訳は“*No One's Perfect*”という題名です。「完全な者はいない」という意味です。両手両足のない洋匡さんだけが五体不満足なのではなく、私たち誰にでも色々な欠けがあるという意味でしょう。

独訳は“*Leben ist Freude*”（人生は喜びだ）という題名です。

欠けのある私たちが「人生は喜びだ」、生きているのは嬉しい、と生きることができるのです。

どうしたら生き生きと喜んで生きることができるのでしょう。『五体不満足』を読んだ人は分かるでしょう。

両手両足がない洋匡さんが生まれた時、最初お母さんがビックリするといけなと思って、お父さんもお医者さんも洋匡さんとお母さんを会わせませんでした。でも我が子を母親と会わせないなんてできません。

一週間後、最初のご対面となりました。

みんなは、お母さんが卒倒してもいいようにベッドを用意し、倒れるのを受け止める準備をしていました。

洋匡さんと会ったお母さんはどうしたのでしょう。

「かわいい」と言って洋匡さんを抱きとめたのです。

親に愛されている。この真実が彼の一生を決めました。

欠けのない子供はいません。でも可愛いのです。

完全な子供はいません。だから可愛いのです。

● 親馬鹿の愛情があるから私たちは、人生は喜びだ、と生きることができます…

この本の帯には「障害は不自由だけれど不幸ではない」とあります。

『五体不満足』という本のタイトル同様、私にとってこの言葉はとても印象的でした。

今この本が世界でも多く読まれ、さらに奥の深いタイトルとなって、世界中の人たちに読まれていることを嬉しく思いました。

それにしても『五体不満足』が英語版では「完全な者はいない」という訳になり、さらにはドイツ語版で「人生は喜びだ」となったことは、まさにそれぞれの国の「国民性」「らしさ」を現していると感じ、感慨深いものがありました。

視点
論点
問題点

ここにとりあげたのは、共に新聞の折り込みとして目にとまったもの。

右は「GLOBE」。朝日新聞が2008年10月に創刊した別刷りで、隔週の月曜日に発行されている。

年内は4ページだが2009年から8ページに拡大するそうである。

その名の通り内容は、世界的・地球規模といった大きな枠でのとらえ方で、環境・経済などを掘り下げる。

紙面から、時代に置き去りにされない視野の広いジャーナリズムをめざしている心意気は確かに伝わってくる。

左は「こころ」。毎日新聞の2007年6月に創刊したタブロイド判月刊紙。

こちらの内容は先例とは一転して女性読者目線だ。『自分の半径1メートルから始める「こころ」よい暮らし』と前書きにあった。手作り感のある、背伸びでない豊かさを目指そう…との提案なのだろう。

こうした新聞紙面の試みは、言われて久しい「活字離れ」への抵抗として、ほかの新聞社でも試行錯誤しているのだろうと予想する。

新聞に読者は戻ってくるのか

企画はもちろん、表現にも力を注ぎ、「GLOBE」はADに木村裕治氏を起用して、朝日新聞としても力が入っているのが分かる。

「こころ」は24ページもあって、写真・イラストなど贅沢に使って、ほとんど雑誌のような体裁だ。両方ともデザインという観点でも申し分ない。

ここまでして、では「新聞に読者は戻ってくるのか」ということを考えると、はなはだ心許ない感じを持つのは、私だけではないだろう。

私がこの2つを取り上げたのは、そちらへの意味からだった。

Webと携帯電話がここまで普及した中で、「新聞くらい読めよ」「少しは本を読めよ」と言ってはばからない私たち世代でさえ、新聞に中身に目を通すのは週末くらい、ウイークディは目次だけ読んで慌てて出社し、帰宅してからはテレビで…といったライフスタイルになってしまっている実情がある。

そういえば日経新聞のように仕事に直結したものを除いて、電車内で新聞を読む姿は、最近めっきり見なくなった。

そうした社会状況下でも、企画が良ければ、

読者の求めているニーズに的確に答えていけば「新聞に読者は戻ってくる」のか。

さらにグラフィックデザインの末端に関わる者として、デザインの力でどれだけ「新聞に読者が戻ってくる」のか…下に取り上げた「カラマーゾフの兄弟」の文庫本のようなことが起こるのか…

正直、諦めという無力感が支配的ながらこうした試みをしばらく注視していいたいと思っている。



文庫本のカバーが熱い

書店では文庫本が平積されて、例年のように夏休みキャンペーンが始まった。

そんな時期、娯楽色の強い読書傾向と思っていた息子が、漱石の「こころ」を始め古典に属する文庫本をまとも買いだ。

「書店では膨大な量の本を前に、何を選んだらよいのか途方に暮れるが、書店員の小さな推薦カードやジャケットデザインの目新しさが後押しになった」と言う。

私も「蟹工船」「こころ（ダブってる!）」などを、ジャケットに惹かれて買っていったっけ…そういえば今年は特に新ジャケットが目についた。

活字離れ・出版不況といわれて久しいが、こうした売る側の工夫で、時代を超えて価値を持っている本にスポットが当たり、また売れ出すことが実際にあるということである。

ここに写真で紹介した文庫本は数年前、まさに表紙の絵にひかれて買ったものだ。

この「ちいさな王子（星の王子さまの新訳）」だけでなく、このシリーズは全てこの人の一筆書きのような不思議な魅力の絵で装丁されており、「カラマーゾフの兄弟」をはじめとした古典作品ばかりであるが、今も平積みでおいっている書店をよく見かける。それだけコンスタントな人気があるということなのだろう。

最近の新訳・新装といった傾向の、先駆的なシリーズだったのかもしれない。（2008年）



新聞の全面広告に釘付けになった。

左コーナーで紹介した文庫シリーズの、ドストエフスキーが売れていることという内容である。

前に私が取り上げた時は、装画・装丁にフォーカスしていたわけだが、この広告では訳者の写真をメインに「新訳」の素晴らしさを前面に訴えている。

いずれにせよ、売れているからこそ打てる広告ではある。

ドストエフスキーが読まれている…そのバックグラウンドに、今の行き詰まった世相があるのは間違いない。

そんな中で読者層はどんな分布なのだろうか。広告は少なからず若い層を意識しているようだが、実際はもっと広範囲なはずである。

団塊世代あたりの「再読」派もかなり多いのではないだろうか。私自身にも言えることだが、若い頃読んだこの手の古典は難解だった。

悩み多きこの時代に改めて読み直しておきたいという欲求は、相当あるはずだと思うのだが…

この難しい状況の中で生きていくため、さまざまな模索がある。

「蟹工船」「こころ」「罪と罰」…温故知新。「悩む力」が求められている。（2008年）

「文庫本のカバーが熱い」のカバー

e verblue エバーブルー

『everblue』
地球の未来と環境問題を考える
フリーマガジン

■ 飛鳥井 羊右



これ、季刊らしいのですが、もう25号。6年以上発行されているって事になるのでしょうか。長いですね。内容・編集・デザイン…全て良いです。

フリーマガジンというものがものすごく沢山出るようになってから久しいと思います。デザイン的な底上げがされたために、さすがに「これはヒドい！」というものはなくなって来ています。そのせいか、相対的にずば抜けて「これは良いぞ！」というものも発見しにくくなってきている気がします。そんな中で「これは良い！」と思ったものが『everblue』。文字と写真などの絵柄のバランスが良い。多分、編集とデザインが最終形のイ



メージを共有しているからできるデザインなのでしょう。文字ばかり多かったり、逆にスカスカ感が目立ったりするような、バランスの悪いページが無いのです。記事ごとにデザインの変化もあり、書店で売っていてもおかしくないレベルです。

この本のテーマ「地球の未来と環境を考える」これをフリーマガジンで出すという事をよく考えたなあ… スポンサーを募り、出資を受け、それで商業雑誌並のクオリティでありながらフリーマガジンという形態を実現しているのだと思うのです。半分企業PRの意味合いもあるけれども、この雑誌によって環境への色々な取り組みというものを知ることができるのは、とても意味がある事だと思います。エコな活動をしている事は、今の企業にとってはプラスになる事なので、この形が成り立つのでしょう。

タワーレコードやアウトドアグッズショップなどに置いてあるみたいなので、見つけたら是非に取ってみてください。

Manifestoのデザイン

自民党と民主党のマニフェストをもらった。

■ 堀木一男



自民党のマニフェストはシンプルで絵本のような。

タイポグラフィーとサイン、シンボルの展開で色も見開き毎のテーマカラーといった案配でありデザイナー好みこの上ない。

一方民主党のマニフェストは太いゴシック体で黒と赤い文字でこれ以上のコントラストはない、と言った趣である。ほとんどの頁に党首の写真が出ずっぱりで、濃い感じである。最後にマニフェストの各論が小さな文字で組まれており、いやが上にも密度が上がる。

両方を比べて軽やかできれいな自民党のマニフェストをみて一般の人がどのように感じるだろうかを思った。苦い思



い出や現実を直視せざるを得ない人にとってはリアリティーを感じないものになったのではないかなそんな気がしたがいかがだろう。

ちよつと一皿

またしても本屋さんで、料理関係の雑誌を一冊買ってしまいました。雑誌というよりは、雑誌の付録のようなそんな感じの一冊です

■ 沢田寛子



また「料理関係」と書いたのは、「これって料理？」と言えるのか、と思ったからです。

まずは表紙の一品、「半熟卵のベッパオリーブ」。

ゆで卵を半分に切って、オリーブ油に塩、黒コショウ…料理の定義って何だろう？？なんて難しいことは言っていないで、とにかく作ってみてよ。そんなことを言われているような一冊、いや一皿でした。

で、表紙の一皿。簡単！美味しい！この一冊をヒントに、自分でも色々な一品が浮かんできそう。

表紙も中も白っぽい紙面です。開くとまっすぐまず料理に目がいきます。「お～、これは簡単で美味しそう！」ではさっそく作ってみましょう、といった流れ。

また手書きの印刷物に惹かれてしまった

■ 岡野祐三

思わず手に取るチラシ広告。乙にすましたデザインチックな広告ではない、手作り感覚の親しみやすさ。この説得力にはまいてしまう。



新聞折り込みチラシの中に、ふっと見に止まったこの広告。

全面単色で手書きの地味なチラシだが、なぜか惹かれて手に取った。地元の小さなバス会社のツアー案内広告だ。

旬を重視した欲張らないツアー、心温まるコピー、出発地が地元でリーズナブルな価格…。親しい友人が、仲間のために作ったような体裁と内容に素直に旅に出たくなってしまった。

書店員の小さな推薦カードで思わず本を手に取ってしまうのと同様、身の回りの過剰な情報の中「パーソナル」コミュニケーションに渴望しているところが、私の中にもあることを認めざるを得ない。

カラー刷りで大がかりな大手ツアー会社のパンフレットや、タレントを起用し

た華やかなテレビコマーシャルよりも、こうした地味なチラシの方が説得力を持っている事実。

マスコミュニケーションの担い手として、印刷物に関わる私たちデザイナーは何かを考えなければならないのだろう。しかしこのチラシ（人に指摘されるまで全くの手書きと疑ってなかったが）良く見ると実は手書き文字をフォント化して使っていてびっくりした。アナログを目指すツールとして巧みにデジタルが使われている。

ねじれているとも言えるが、素朴に見えてある意味高度なのであった。

美しい機内誌

お気に入りの
「ルフトハンザ」の
機内誌です。

■ 沢田寛子



ドイツに住んでいる従妹に頼んで時々
持って帰って来てもらっています。

最初にコンビビアのみんなに、この機
内誌を紹介したのは、もう20年以上も前
のこと。

完璧なグリッドシステム、上質な写真、
絶妙な余白のバランス、そして主張しな
い文字組。

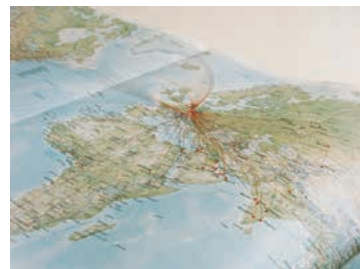
さりげない、やりすぎない、凝ってい
ないのに惚れ惚れとして美しいです。

「ここがヘンだよ〜」「あつ、このアキ
気になる」「何この色」全くなしです。

見事になしです。

だから惚れ惚れとして美しいです。

日本の雑誌のように、漢字があって、



平仮名があって、カタカナがあって、欧
文もあって、ルビもついて… がないの
です。

開いた時に目に飛び込んでくる、文字
組のテキスチャーが均一でとても綺麗。

せっかくカラーなんだから、色をいっぱ
い使いたい… もありません。

コーポレートカラーの紺と黄色が、とこ
ろどころにあるだけ。

今回のこの冊子は、20年前の機内誌
に比べるとだいぶ若くなった印象です。

ロマンスグレーのおじいさんから、カッ
コイイ孫に世代交代したような。

(途中のお父さんの代もあったのでしょうか)

ちょっとしたところ(ほんのちょっと
だけ)にデザインの遊びが出てきている
ところにも、そのことを感じられます。

でも相変わらず、この冊子作りのキー
ブコンセプトである「美しく」は変わって
いないと思います。

こういう雑誌「作ってみた〜い」。

*追伸です。

地図も綺麗なの!!

BOOK OFF でみつけた雑誌

希少価値の古雑誌
タイポグラフィーで
見せつけてくれます。

■ 堀木一男



古本屋ではめったに雑誌にはお目に
かからないのだが、先日目に付いた
DIRECTOR'S MAGAZINEはタイポグ
ラフィーのこだわりが、一貫していて
面白いと思った。

もちろん画像もあるのだが、徹底し
た文字組で見せるページネーションは、
内容の面白さの反映であろう。

語り手である様々なDIRECTORの思
いの深さが編集者の強烈的な意志になっ
ていて引きずり込まれそう。

ひとたび本文に目をおとしたらしば
らくは帰ってこられなような魅力的な
語り口である。

タイポグラフィーはこうでなくちゃ
ね。

HEX ANTISTYLEの商品カタログ

男性ファッションをやっている義郎君
(息子) たちが商品カタログを作るとい
うので、どこかで手伝えるかと思って
いましたが、できあがったものを見てびっ
くり。想像すらできない世界でした。

知らない世界とはいえ、なにやら対
極の世界を見せられているようで、眺め
ていると、次第に濃密なそれなりのクオ
リティー感が伝わってきます。

ファッションにいいこも悪い子もな
いはずですが、とんがった偽悪的なファッ
ションに取り組んでいるクリエイターた
ちの存在意義がたしかにみてとれます。

お見事



思いがけない世界観に
新鮮な驚きと、その世界を表現する
クオリティー感を見る

■ 堀木一男



オッいいじゃない……このDM。

ファッションもアートなら
宣伝物もアート？
コレクションの価値アリ！

■ 岩崎邦好



DMといってもポスターのような広告と
商品のカatalogです。

ARTS&SCIENCEというGENDERを
越えたメンズエッセンスの服をつくっ
ているアパレルメーカーの、1ヶ月限定
ショップを「disupray」という店舗会
場で展開するという案内です。

一つは新聞紙サイズのざら紙の1枚
に商品1展の写真ともう1枚に最小限の

メッセージがモノクロで刷られたもの
です。

もう一つは100ページを超える本仕
立てのカatalogです。見開きに商品の
カラー写真が1点ずつ、その裏面の見開
きに商品を描いたモノクロの線画と価
格などのデータが印刷されています。

両者ともシンプルでナチュラルな
テストで、かつレトロでモダンな
ちょっといい感じのデザインです。

特におもしろいのは、カatalogに表
紙らしきものがなく、糸かがりがむき
出しになっていて作りかけの本といっ
た趣です。

ちょっとアートので常識をくつがえ
した面白い作りです。

商品の風合いや色、形が醸し出す印
象とよくマッチしていて、うまいデザ
インだと思います。

ファッションも宣伝物も一つのアー
トとして積極的に捉えた新しい手法だ
と感じました。



鉄紙

このものの
 雑貨屋や文房具屋を
 見て歩くのが楽しく
 て良く行きます。気
 がつくとき色々買っ
 ます。ちよつと並べ
 てみました。(山田)

鉄という塊の持つ存在感

文鎮という機能や、刃物という機能に
 特化して成形された形は、シンプルな機能は元より
 施された意匠のシンプルさもお気に入りです。

無限の変化をみせる素材

描いて、切って、折って、貼って、留めて。
 時には重なり、時には組み立てられ、
 …万能の素材。様々な表情。



岩手県、南部鉄器。漆で施された表面の処理が手に馴染む

兎の底に大城山の彫りがありま
 すが、出所不明

高知県、土佐打刃物



浅草で手に入れた木版による
 のし袋

版画家、野中光正氏のぼち袋。
 同じ柄は無い。(▼裏面)

韓国語の版がデザインされた
 封筒(韓国製)

ピンポイントな世界

大きな領域からピックアップされたモノやコト。
そういうピンポイントな世界への共感。
ありますよね？ コレってどうですか？



『草手帳』 select: 岩崎
かわしまよう子 著
ポプラ社 ¥1,300

身の周りにあたりまえのように咲いている雑草を、一本ずつ取り上げて紹介してありますが、植物図鑑のたぐいではありません。右ページに写真、左ページにその雑草にまつわる話が書かれています。

まずこの本を一目見て気に入ってしまったのは、著者自身が撮影した写真です。紙の上に置かれて撮られた写真は、雑草の特徴をうまく生かして配置されています。一幅の絵を見ているようです。

それから文章です。雑草の特徴や名前の由来、著者との関わりや思いなどが込められています。著者の優しい眼差しが雑草から宝石のように放たれているように感じます。
この本を期に私は、足下や道端をキョロキョロしながら歩くようになりました。

小さな雑草には、実にみごとに造形が施されていることを教えてもらいました。

フランス装風の造本はノリ付けがあまくちょっとがっかりですが、私の宝物になりました。

『へんないきもの』『またまたへんないきもの』 select: 飛鳥井
早川いくを 著
バジリコ ¥1,575円 (2冊とも)

もう、なんでしょ？ 変過ぎ。

世の中には「変なの～」って思うような生物が沢山。しかも生態が解明されてなかったりするし…

人間が理解できなくてもそれぞれの生物には、それなりの理由があって不思議な形や生態をしているんでしょうけど、分からないから余計におもしろい。この本は著者の解説とイラストレーターさんのイラストによって、見開きで一つの生物を紹介してるんですが、文章が面白い。

なんて言うのかなぁ？研究者がマジメに調べて解説してるのと違って、形や生態にツッコミいれつつ時々話が脱線したり…いい具合に力が抜けているのが僕のお好みなんです。

ワクワク感がこの本にはある……と感じるのは僕だけかもしれないけど、なんだか普通に図鑑で生物の生態を読むよりも楽しく読めると思います。

知らない事を知るって楽しいですよ♪ (2008年11月8日の寄稿)

『ブチ哲学』 select: 大友
佐藤雅彦 文と絵
中央公論新社 ¥680

書店のレジ横に置かれていて、なんとなく手に取ってみたら面白そうだったので、ついそのまま購入してしまいました。内容は、文字が少なくほとんどイラストで説明されています。

イラストも力の抜けた、や〜んわりした感じのイラストで、割と誰でも手に取りやすそうな印象を受けました。

もともと数字やパズルが好きだったので、内容にも抵抗なく読むことが出来ました。

基本的に4ページで1つのテーマが完結しているので、ちょっとした時間に読めるお手軽さも良かったです。

この本は、とにかく敷居が低いです。

僕は本を1冊読むのに恐ろしく時間が掛かってしまう人間ですが、この本は文字がほとんどないので、その心配はありません。本が苦手な人にも勧められる様な1冊では？と、思います。

『ダム』『ダム2』 select: 飛鳥井
萩原雅紀 著
メディアファクトリー ¥1,680 (2冊とも)

ダムです。

河をせき止めて、治水したり発電したり農業用水や飲料水を確保するためのアレです (笑)

旅行のついでに立ち寄った群馬県北部にある「奈良俣ダム」に感動を覚え、以来毎年いくつかのダムを見て回っています。

良く見ているウェブサイトの管理人さんが出した写真集が……『DAM』と続編の『DAMDAM』です。個人が趣味でサイトやブログを立てて、それを書籍化する形での出版が、結構前から流行っていますよね。

最近ではこういうルートからの出版物が目に見えて多くなって来ています。本や雑誌が売れないという状況が続いてますが、こういうコアなファン層をターゲットにしたものは、サイトやブログの反響などから販売が見込めるらしいです。

大きさも大きすぎず、価格もお手頃なので非常に嬉しい本が出たと思って買いました。ダムが好きな方は是非！

あと、『ザ・ダム』というDVDも出てます。

…スゴい良いですよ♪ (2008年7月30日の寄稿)

さらに色色

アンテナに引っかかる物は
無差別にセレクト。
「ナンカイイ」コレ大事



「岸辺のふたり」 select: 大友

この作品を知ったのは学生の時、たまたま店頭でDVDを見かけて、パッケージに惹かれて買っただけでした。

しかし、家に帰って観てみると、独特のタッチと世界観、内容に当時とても驚きました。

最近、再び棚から引っ張りだして久々に再生してみたのですが、やっぱり良い！というか、以前観た時以上に感動的でした。色々なものを観たり、多少なりとも経験を経てから観たからでしょうか。

おそらく、何年後に観ても色褪せない、何度繰り返しても「良い」と思える作品だと思います。



「セロテープアート」 select: 飛鳥井

『セロテープ誕生60年記念 瀬畑 亮 セロテープアート展』2008年12月〜09年2月 練馬区立美術館

作品はとてもセロテープとは思えない程の質感。大きいものだと100kg以上あるそうです。滑らかな曲線…不思議な造形…なんでしょ？なんだかよく分からないものばかり。説明難しい…

30年近くセロテープを使って立体や平面作品を作り続けてきた結果がこの作品集にあります。

ひたすら続ける事…それが大事なんですね。

「箱根の森から」 select: 沢田

発売前から新宿駅構内や、地下の連絡通路などでポスターを見かけ、一滴の雫と森の木をイメージしたすっきりとした、いいポスターだなあ、と思っていました。

そして2009年4月4日に売り出されたボトルのデザインも、ポスターからのイメージ通りシンプルでとても素敵。「私大好きデザイン」です！

実はこの「水」、環境への取り組みとして、商品の売上げ1本につき1円を箱根町に寄付し、箱根地区の環境美化・湿原の保全・植樹等にも協力しています。

「あなたが飲むと、森がうるおう」

このキャッチコピーにも納得です。





眼がね：物を見て、その善悪・可否を考え定めること。鑑識。めきき。(広辞苑より)
週一回「お気に入り」というテーマで、スタッフが順番にモノやコトを持ち寄ります。それらをブログで発表してきました。この「OMEGANE」は、それぞれの関心が様々に語られているブログの内容を少し編集して、まとめたものです。

編集・デザイン
岩崎邦好／山田純一

コンビニアスタッフ
堀木一男
岡野祐三
沢田寛子
飛鳥井羊右
大友淳史



表紙のモノ：ぼち袋